

SESSION 2016

AGRÉGATION CONCOURS EXTERNE

Section : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES
LANGUE ET CULTURE JAPONAISES

COMMENTAIRE DE TEXTE EN LANGUE JAPONAISE

Durée : 7 heures

Documents autorisés : Dictionnaire Kôji-en, Iwanami, 1983, et rééditions; Dictionnaire Taishûkan kango shinjiten, Taishûkan, 2001, et rééditions.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel électronique (y compris la calculatrice) est rigoureusement interdit.

Dans le cas où un(e) candidat(e) repère ce qui lui semble être une erreur d'énoncé, il (elle) le signale très lisiblement sur sa copie, propose la correction et poursuit l'épreuve en conséquence.

De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, il vous est demandé de la (ou les) mentionner explicitement.

NB : La copie que vous rendrez ne devra, conformément au principe d'anonymat, comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé comporte notamment la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de signer ou de l'identifier.

日本語で次のテキストの解説をしてください。

Extrait de : 吉田裕『アジア・太平洋戦争』、岩波新書、2007年

国民生活の実状

日本の戦時体制の最大の特質の一つとしては、戦時体制の強化と国民生活の窮乏化とが、常に併進したことがあげられるだろう。この点では、同盟国のドイツとの間にもかなりの違いがあった。ドイツの場合、政府が生活必需物資の確保を重視し、時には軍需のある程度、犠牲にしても、国民の生活水準の維持に努めようとした。このため、個人消費支出は、四三年の時点でも、第二次世界大戦開戦時(一九三九年)の八割の水準を維持していたし、戦争末期の四四年の時点でも、世界恐慌によって個人消費支出が最も低下した二二、三三年の水準をやや上まわっていた(山崎広明「日本戦争経済の崩壊とその特質」)。

これに対して日本の場合には、日中戦争以降の物動計画そのものが、限られた国力の下で軍需生産を急速に拡充するため、民需を犠牲にするという政策を意識的に採用していた。ある企画院調査官は、物動計画には、民需に対する配慮がなく、「民需とは濡れ手拭のようにしばしばしほる程余裕のあるものだ」との観念に支配されていたと回想している(田中申一「日本戦争経済秘史」)。この結果、軍需の拡充に反比例する形で、国民生活の水準は切り下げられた。このため、国民の生活水準は、日中戦争以降、一貫して低下し、個人消費支出は、早くも四二年の時点で日中戦争開戦時の水準の八割を割ったし、アジア・太平洋戦争開戦前の四〇年の時点で、昭和恐慌下の三〇年の水準を下まわっている。最近では、戦時経済の国際比較が進んでいるが、それらの研究では、ドイツと比較した場合、「日本の生活水準切下げが激しく、植民地・占領地ではさらに厳しかった」と結論づけられている(原朗編「日本の戦時経済」)。

なお、アメリカの場合は、日本と好対照をなしている。戦時体制への移行と軍需生産の本格化のなかで、アメリカ経済は驚異的な成長をとげ、四〇年の国民総生産は九七億ドルは、四五年には二一九億ドルに拡大した。これにともない、長い間、大恐慌に苦しめられてきたアメリカ人の生活水準は急速に上昇する。「アメリカは、戦時中に生活水準を向上させた唯一の国」となったのである(上杉忍「二次大戦下のアメリカ民主主義」)。このことは、アメリカの一般の国民にとつても、戦争が充分「ペイする」ものだったことを意味している。しかし、この時、形成された「よい戦争」という楽観的な戦争観は、広範な国民の生活実感に裏打ちされたものであつただけに、その後、現在に至るまで、アメリカ人の戦争観を呪縛し続けてゆくことになる。

日本の戦時経済の進展が国民生活を直撃したのは、配給制度と労働力動員を通じてである。配給制度とは、日中戦争以降の戦時経済の下で、生活必需品などの分配を政府が統制するために導入された制度であり、政府の決めた分配量だけを各自が公定価格で購入することができた。国民は配給された食料や生活用品を配給所もしくは隣組を通じて、入手したのである。四〇年六月からは六大都市で砂糖とマッチの配給制が始まっていたが、国民生活に決定的な影響を与えたのは、四一年四月から六大都市で実施に移された主食の米の割当配給制である。これによって、普通の大人一人の一日あたりの配給量は、平均的な消費量よりかなり低い二合三勺にぶくに設定され、以後、同年中にこの制度はほぼ全国に波及してゆく。この二合三勺という割当量は、形式的には四五年五月まで変わらなかったが、米にかわって、麦・いも類・雑穀などが混入されるようになり、四四年一〇月には、主食配給量のうちで米の占める割合は、六六%にまで低下している。

さらに、アジア・太平洋戦争の開戦前後から配給制はいつそう拡大し、四一年一月からは魚類が、翌四二年二月からは、衣料品と味噌・醤油が、続いて一月からは青果物が配給制に移行している。しかし、実際には、当初の割当基準量を維持することさえ困難であり、配給品の粗悪化とも相まって、国民生活は急速に窮乏化していった。同時に、現実には配給品だけで生きてゆくのは不可能だったから、多くの国民は公定価格制度違反の闇取引によって、米や野菜などを購入するようになった。闇取引の常態化である。

労働力動員 軽工業中心の日本の産業構造を軍需産業＝重化学工業中心のそれへと急速に編成がえてゆくためには、労働力の面でも、強力な国家統制が必要となった。政府は、重化学工業部門へ労働力を重点的に投入するために、商業や軽工業などの平和産業部門からの労働力移動政策を強行したが、その政策の要となったのが、三九年七月に公布された国民徴用令である。三八年四月公布の国家総動員法に基づく勅令として公布されたこの国民徴用令は、国民を政府の指定する業種に強制的に就業させる法令であり、重化学工業部門への労働力の「狩り出し」政策に決定的な強制力を付与した。軍隊への召集令状が「赤紙」とよばれたのに対して、徴用令書が国民の間で「白紙」とよばれたのは、そのことをよく示している。

国民徴用令は、一六歳以上四五歳未満の男子(技能者の場合は五〇歳未満)と一六歳以上二五歳未満の女子を徴用できると定めていたが、四一年八月の閣議で労務緊急対策要綱が決定されると、大規模な徴用が急速に進行し、四三年七月の改正では、徴用の対象は、一二歳以上一六〇歳未満の男子、一二歳以上四〇歳未満の女子にまで拡大された。また、四三年一〇月の軍需会社法の公布によって、軍需会社の場合には、事業主と従業員を丸ごと徴用することも可能になった(現員徴用)。こうしたなかで、敗戦時の被徴用者数は、新規徴用＝一六〇万九五五八名、現員徴用＝四四五万四四九九名にも達した。なお、女性の場合には、法的強制措置をとまらぬ徴用という形での労働力動員は行なわれていない。

国民意識の変化 戦局は急速に悪化していたとはいえ、政府と軍部による徹底した情報統制によって、一般の国民は戦局の正確な実相を知りえなかった。そのため、戦局の悪化は国民の戦意の低下には、すぐには結びつかず、両者の間にはかなりのタイム・ラグが存在した。それでも、ガダルカナル島を中心にした南太平洋方面の戦死者が公表されると、宮城、福島、新潟など、戦死者の出身県には衝撃が走った。四三年七月に内務省がまとめた「南太平洋方面戦死者発表に対する反響」は、「一般的には寧ろ益々敵愾心の昂揚せるを認めらるゝ状況」としながらも、「当初其の戦死者の予想外に多数なりし為、各方面共、相当の衝撃を受けた」事実を認め、次のように指摘している。

遺族中最も大衝撃を受けたるは老人及び婦女子のみの家庭にして、戦死の内報に接し発作的に精神異常其の他の発病を□(判読不能)せるもの散見せられ、又其の言動も悲観の極、厭戦的、自暴自棄的なるもの比較的多数あり。

戦死者の公表に際して検閲当局は、国民が戦死者の総数を知ることができないよう、戦死者名の公表を、「当該(地方)新聞の直接関係ある地方の戦死者名のみ止むること」などの措置を講じていた(中園裕「新聞検閲制度運用論」)。それでも、地域社会の動揺を完全に阻止することはできなかった。四三年五月、仙台予備士官学校に甲種幹部候補生として入校した作家の戸石泰一も、福島・宮城の県境から仙台市まで連続行軍を行なった際に、ほとんど二軒に一軒の割合で、「戦死(歿?)者の家」という「新しい木の標札」が掲げられているのを目撃している(戸石「消燈ラッパと兵隊」)。